

## 近世日本における武士道と食事作法

小林 加代子\*

### はじめに

近世武士社会において日常的な礼儀作法が大変尊重されていたことは、江戸幕府による統治国家として、その封建的階層的秩序を維持することが最たる目的であったと考えられている。相良亨は、この大方の理解を「礼儀がこのような役割をもっていたことを認めなければならない」<sup>1</sup>とした上で、武士社会に生きていた礼儀は、秩序を維持するためのものとしてのみ受け止められていたわけではなく、武士としての威厳を保つためのものでもあったことを指摘する。現在、礼儀作法の流派として名高い小笠原流礼法は、その草創期は武家故実全般の流派として殿中儀礼の弓術や馬術などの指導を行っていた<sup>2</sup>。そもそも武士の礼儀作法とは、本来的には武士社会で「武士として正しく生きる」ために編み出され、受け継がれてきたものであったのである<sup>3</sup>。

では「武士として正しく生きる」とはどのようなことか。江戸時代後期の武士道論者である大道寺友山は、初心の武士の心得を説いた『武道初心集』において次のように述べる。

武士たらんものは正月元日の朝雑煮の餅を祝ふとて箸を取初より其年の大晦日の夕に至る迄日々夜々死を常に心にあつるを以本意の第一とは仕るにて候<sup>4</sup>

この一節はいかにも戦国乱世の武士のような激情的な生き方を奨励しているかのようであるが、

そうではない。友山の言う「死を常に心にあつる」とは、「忠孝の二つの道にも相叶ひ萬の悪事災難をも通れ其身無病息災にして壽命長久に剩へ其人がら迄も宜く罷成其徳多き事に候」<sup>5</sup>という、いわば武家に仕える奉公人としての生活態度を保つことが目的とされているのである。たとえば「人に物をいふ」ときは「武士の身にては一言の甲乙を大事と心得」<sup>6</sup>することで、無益な口論は起こさない。また、人はどのような身分にあっても「死を忘るゝ」ものであるから「常に過食大酒淫亂等の不養生」をし、思いのほか若死をしたり、存命であっても何の役にも立たない病人となることがある。これでは奉公は務まらないから「常に死を心にあつる」ことで、「補養の心得を致し飲食を節に仕り色の道をも遠ざくるとく嗜みつゝしむ」<sup>7</sup>のである。

このような心得をふまえて、友山は武士の行住坐臥について次のように述べる。「武士たらんものは、行住坐臥二六時中、勝負の気を忘れず心におくを以て肝要とは仕るにて候」、「武門におみてはたとひ末々の小者中間夫あらし子の類に至る迄常に脇指をはなしてはならぬ作法に定る也」<sup>8</sup>、つまり、武士として腰に刀剣を帯びるからには、いつ何時も「勝負の気」を忘れること無く行動する。武士の日常における心がげや立ち居振る舞いはすべて「勝負の気」を意識して行なわれるものと考えられていた。

以上のように、彼らの行動は、日常的な身のこなし、言葉遣い、身嗜みにいたるまで、みな戦闘時におけるあり方が基準とされていた。すなわ

\* お茶の水女子大学大学院院生

ち武士の礼儀作法は、社会秩序の維持という役割を持つという一面だけではなく、武士の戦闘者としてのあり方が表現されたものとして考えられる必要がある。このことは、太平の世における新しい形の武士の思想を指す儒教的な「士道」においても、戦国乱世の戦闘者の思想を指す「武士道」においても、基本的に変わらないものであった<sup>9</sup>。

こういった日常的な立ち居振る舞いの中でも、食事に関する礼儀作法は重要な位置を占めていたと考えられ、多数の記録が残されている。本報告では、近世武士道書の中でも「士道」論を代表する山鹿素行「士道」(『山鹿語類』巻二十一)、「武士道」論を代表する山本常朝『葉隠』を取り上げ、それらに見られる食事作法の記述に焦点をあてる。そして、そこにあらわされた武士のあり方について検討することにより、戦闘者としての武士の本質がどのような形で礼儀作法として表現されていたかを明らかにしたい。

## 一、山鹿素行「士道」に見る食の作法

いわゆる「士道」論者の代表と目される山鹿素行は『山鹿語類』の主要な一章である「士道」で、日常における武士の行動を細目に分け、すべてについてあるべき礼法を詳細に解説する。そして、そこに武士としての「威儀」を見出している。

素行において「威儀」とは「身を敬むるの術、先威儀の則を正しくするにありぬべし」<sup>10</sup>とされる。ここで「敬むる」とは外形を規制する意味で使われており<sup>11</sup>、その術としての「威儀」を許文正<sup>12</sup>の言葉を引用し、次のように説明する。

威儀外に正すときは、則ち敬身の大体を得んといへり。ここに威儀の則ち何をか先にせんとならば、身にをいて視聴言動を非礼のために感動せしめざる、是威儀の要と謂ふべきなり。<sup>13</sup>

外形を規制する「威儀」が正しく守られていれば、それが身を「敬む」ということにつながるといふ。素行においては、人のあり方は「威儀」が正しく、礼にかなうものでなくてはならないとされる。そして、人の心性はすべて内面のものであり、体の動きやものを見たり聞いたりという動作は外面に属するものであるが、それらは「本一致にして別ならず、外其の威儀正しきときは内其の徳正し。外にみだるる処あれば内必ず是に必ず」<sup>14</sup>とし、外面的な「威儀」を細かく究明して正しくすることによって、心の持ち方も自然と正しく整うものであるという。

では、武士において「威儀」を正しくすることは具体的にはどのようなことなのか。素行は「威儀」という言葉の「威」について、「其の容貌より言語に至るまでかるがるしからず、甚だをごそかにして、人以て畏るべきの形」<sup>15</sup>と説明している。そして「儀」とは「容貌の物にまじわり、言語の事に及ぶまで、詳に究明するを以て、其すがた人々皆のつとり手本と仕るべきに宜しき」<sup>16</sup>ことである。武士は「威儀」を正すことによって、自己の内面を整えるのみならず、他者に対して「人にて畏るべきの形」として対峙しなくてはならない。これはつまり武士の戦闘者としての本質たる強さ、友山の言う「勝負の気」を、平時において表現する方法であるといえる。

武士の日常における作法はこういった「威儀」の正しいものでなくてはならず、それは「飲食の制則ち威儀の因る所なり」<sup>17</sup>と述べられているように、食事の場でも例外ではない。素行は「凡そ飲食に当りて其の礼正しからざれば、威儀ここにかけぬべし」<sup>18</sup>、つまり礼儀正しくなければ「威儀」を欠くとして飲食の席に臨む際の礼儀作法を事細かに規定する。たとえば「容貌を正し左右を考へ、長者、箸を取て而して我これに従ふ」として、食事を始めるときは各々年長者の行動に従うということ、また「食する事大口になく、喰ときは四方を見ず、顔色を正しからしむ」「箸を持所の

形、肩背の容、心を付くべし」と、食べる時の身のこなしについても解説を行っている<sup>19</sup>。

さらに、素行の述べる作法は、表情や箸の持ち方、姿勢に留まるものではない。「美品なりと云ども其一色を嗜べからず」、「多くのそえものを悉くくらい散し、或は魚肉をかみて汁をこぼち骨をちらし盤を汚す事、甚だ無礼也」、「舌うちを高く仕り、すう音遠くきこゆる、皆小人のわざ也」、「箸を沢す事二寸に及を以て下品の人とす」、「飲食の間、世事を談じ口を開け笑かたる事礼に非ず」など、食べている最中の態度にも常に心を配ることを肝要とする<sup>20</sup>。おいしいからといってそればかり食べていてはならないし、かと言って、たくさんあるおかずをすべて食べればよいというものでもない。魚肉などを食べる際は器を汚さぬよう心がけ、食べる音が大きく漏れないように気を使う。箸もなるべく汚さぬよう、先の方だけを使って食べる。このように、見た目が汚いということは「無礼」なのであり、美しく食事の席を終えることが「威儀」を正すことと考えられていた。素行において、外面的な汚れは内面の汚れに直結するものである。それを正しく保つための「威儀」の究明であり、「威儀」を正すこと、つまり礼儀正しくあるということが武士の戦闘者としての強さの表現ともなっていた。

この作法の実践例が、江戸時代の随筆に見られる<sup>21</sup>。小笠原流のしかるべき人物が、さる貴族の邸宅に食事にやってきた。武家の人間、それも小笠原流の者たちがどのように食事をするのかと、皆が襖の陰から食べる様子を覗いていると、出てきた食べ物をすべて一つの椀にあげ、混ぜて食べてしまった。これにより、一椀以外の器をいっさい汚さずに食べ終えたということで、覗き見していた者たちはすこぶる感心したという。とにかく汚すことなく食事を終えるという美意識が、武家において重要なマナーのひとつとして認識されていたことがわかる。

## 二、山本常朝『葉隠』に見る酒席での作法

山本常朝『葉隠』においても、武士の行住坐臥の基本が戦闘態勢であるという考え方は当然ながら変わらない。たとえば「外には風体、口上、手跡なり。是は何も常住の事なれば、常住の稽古にて成る事也。大意は、閑かに強み有る様にと心得べし」<sup>22</sup>とあり、この「閑か」なる「強み」によって、武士は「常住」、つまり日常的な立ち居振る舞いの中に「勝負の気」を表現する。

『葉隠』では特に酒席での振る舞い方について詳しく述べられていることが興味深い。酒を飲むことに関して日本人が比較的寛容であることは、よく指摘されてきたことだという<sup>23</sup>。酒を飲めば酔い、酔えば日常性を捨てることも大切な作法であるとさえする作法書もある。昭和十四年(1939)に国民礼法の解説書たることを期待して刊行された『日常礼法の心得』では、「仮に酒席に於て、皆が酔払つて暴れてゐるやうな時に、自分一人がきちんと坐つてゐるといふやうなことは寧ろ礼ではない」、「人が暴れてゐる時は自分も暴れるがよい。併しその中にも礼儀といふものはちゃんとある」とされ、いわば酒席での「無礼講」が礼儀のうちであることを説いている<sup>24</sup>。

このような「無礼講」に関する記述は近世以前にも多数見られる。平安時代の『亭子院賜酒記』には、延喜十一年(912)六月に太上法皇が廷臣に酒を賜った記録があり、その酒豪ぞろいの席では皆思い思いに乱れ、誰かが倒れるまで飲み続けることが原則であった<sup>25</sup>。この記録では、泥酔して殿上で嘔吐したことさえ咎められていない。また絵巻の『酒飯論』<sup>26</sup>、仮名草子『水鳥記』<sup>27</sup>などでも、酔って醜態をさらす人物が描かれるが、それらに対して人々は皆そろって寛容なのである。

こういった日本人の態度は、外国人から見て異常であつたらしく、J・ロドリゲスの『日本教会史』において次のように記述されている。「すべての宴会、遊興、娯楽は、さまざまの方法で度がすぎる

程酒を強いるように仕組まれており、そのため酩酊し、多くの者が完全に前後不覚になってしまう」、「宴会を開いてくれた家の主人に敬意と好意を示し、自分らへの接待を喜ぶ気持ちを表そうとして、生来飲めない者までも飲もうと努める」<sup>28</sup>、ただし、このような酒の飲み方は単なる乱酒というわけではないこともロドリゲスは記している。日本にはかねてより儀礼的な飲酒作法が存在しており、それをふまえた上での乱酒、泥酔が「無礼講」とされ、酒宴をすばらしいものに仕上げるための大切な礼儀作法として理解されていたのである。

さて、以上で酒を飲むことに対する日本人の寛容な態度について述べた。しかし、『葉隠』でのそれは全く異なったものであることをここで指摘しなくてはならない。『葉隠』では酒席を「公界もの」<sup>29</sup>、つまり公の場と捉える。武士にとって公の場であるということは、自身の内においてはもちろんのこと他者から見ても、奉公人としての姿を一切崩してはならないという状況である。

たとえば、ある武士が主君のお年賀のお供に出かけたとき、彼は、酒を勧められた場合の対応について次のように述べている。「此度の覚悟、遠所にて酒だらけたるべき候間、酒を仕切申べしと存候」<sup>30</sup>と、田舎では酒づかりにさせられるに違いないため、始めから断る覚悟をしている。しかし「禁酒と申候ては、酒曲にて有やうに候間、あたり申と申て、二、三度捨て見せ候はゞ、其上にては、人もしい申間鋪候」<sup>31</sup>、つまり、禁酒などと言っては酒乱かのように思われ体裁がよくないため「体に障ります」などと言って頂いた酒を杯から捨ててかわすことを試みる。そこまですれば、相手も無理に勧めてくることはないだろうとの考えである。またその挨拶の際は「礼を腰の痛むほど仕、人の言懸ざれば、一言ももの申まじくと存候也」<sup>32</sup>として、あくまで平身低頭、礼儀正しくあることを心がけるとも述べている。このことについて常朝が「魂の入たる者」と褒めているのは、酒に対する態度だけではなく「先の事を前方に分

別する処」ゆえである。武士が何か行動を起こすに際しては、それがたとえ戦闘でなくとも、常にしかるべき態勢を整えておかななくてはならないという考え方がここにあらわれている。

また、酒宴に出席する際の態度については次のように述べられる。

酒盛のやう子はいかふ有べき事也。心を付て見るに大かた呑ばかり也。酒といふ物は、打上り奇麗にしてこそ、酒にてある也。気が付ねば、いやしく見ゆる也。大かた、人の心入、たけへも、見ゆるもの也。公界もの也。<sup>33</sup>

酒席というものは厳しくあらねばならない。しかし、酒席の者たちをよく見てみると、ただ飲んでいるだけの者がほとんどである。酒というものは場をつつがなく済ませてこそであり、それに気を配ることができなければ下品に見えてしまう。先に述べたように酒席は「公界もの」であるのだから、そういった場での態度にこそ人の心がけがあらわれてくると肝に銘じておかねばならない。

もちろん、昔も今と変わらず大酒を飲んで失敗する人はいる。『葉隠』では、そのような人物に対しては寛容ではありえず「残念のこと也」<sup>34</sup>と非難している。そして、「先づ我たけ・分をよく覚へ、その上は呑ぬ様に度有る也」<sup>35</sup>として、自分の飲む量をわきまえるようにと指導する。しかし「そのうちにも時により酔過す事有」<sup>36</sup>として、飲み過ぎることもあるであろうことは認め、そうであるから「酒座にては就中気をぬかさず、図らずも、事出来ても間に合様に了簡有るべきこと也。又酒宴は公界もの也。心得べきこと也」<sup>37</sup>として、武士は酒席にあっても決して気を抜く事がなく、何があっても対処できる状態であらねばならないと指摘している。

ここでの「図らずも」とは、彼らが帯刀していることを前提としており、要するにいつでもその刀を抜こうという態勢でなくてはならないという

ことになる。このように、『葉隠』においても、武士は常に戦闘者たる本質を持って行動することが求められており、その心がけが日常の些細な行為であっても、礼儀作法としてしっかりと表現されていることが分かる。

先に『日常礼法の心得』や『亭子院賜酒記』などで見た酒席に対する日本人の態度が、宴に招かれた者として存分にその場を楽しむことを礼儀と捉えていたのに対し、『葉隠』に見られる酒席での作法は、自身の武士としての立場を第一とするものであった。常に戦闘者としての「閑か」なる「強み」を意識して行動しなくてはならなかった武士の特徴がここにあらわされているといえよう。

## おわりに

以上で、山鹿素行による食に関する記述、そして山本常朝『葉隠』に見られる酒席での作法についての概略を述べた。

素行において武士階級とは、他の三民の指導者として立つものである。そのため『山鹿語類』、特に今回取り上げた「士道」では、武士の日常での振舞いについて非常に事細かに解説し、標準的な枠組みを作ろうとしている。そこで主眼に置かれているのが「威儀」であり、武士の「威儀」とは戦闘者としての本質である「勝負の気」を基本としていた。素行の言う「威」、つまり「人以て畏るべきの形」は、平時においても武士として、いわば「寄らば斬る」の態勢を保っていることを表現するものであった。そしてこの「威儀」という外面は内面の徳に直結するものである。そのため武士はいつ何時も「威儀」を正す、つまり礼儀正しくしていなくてはならなかった。礼儀正しくしていることによって、自己に対しても他者に対しても武士としての強さを示すということになる。それは宴席で食事を楽しむときも例外ではなく、素行は食べる際の身のこなしについて限なく指定し、外形を美しく保ち続けることを強調する。

『葉隠』においても、武士はいつでも「勝負の気」、「閑か」なる「強み」をもって行動しなければならないという意識は同様であった。本報告では特に酒席での態度について検討したが、常朝が常日頃から「懈怠なく身元を嗜み」<sup>38</sup>、油断なき武士であるよう身嗜みの細部にまで気を配り、礼儀作法も抜かりなく行なわなければならないと述べていたことはよく知られるところである。『葉隠』において酒席が「公界もの」とされ、「就中気をぬかさず、図らずも、事出来ても間に合様に了簡可有こと也」とされたことも、「懈怠なく身元を嗜むことの一環であった。

このような戦闘を意識した隙の無い行動は、社会秩序を維持することを目的とした慰懃で折り目正しい行動と自ずと結びついていったと考えられる。そのため、近世武士の礼儀作法においては強さの表現と秩序維持の目的との両立が実現していた。

以上のように、武士の日常における礼儀作法は、「武士として正しく生きる」ことにおいて欠くべからざるものであった。たとえ戦闘など予定されていない宴席にあったとしても、一切の隙を見せず「威儀」を正しくする。つまり、礼儀正しくあるということそれ自体が、平時においても、武士の本質たる戦闘者としての強さの表現となっていたのである。

## 註

<sup>1</sup> 相良亨『武士道』、講談社学術文庫、2010年、153頁

<sup>2</sup> 島田勇雄・樋口元巳校訂『大諸礼集2 小笠原流礼法伝書』、平凡社、1993年、209頁

<sup>3</sup> 小笠原敬承斎『誰も教えてくれない男の礼儀作法』、光文社新書、2010年、29 - 50頁

<sup>4</sup> 古川哲史校訂『武道初心集』、岩波文庫、1943年、29頁

<sup>5</sup> 同上

<sup>6</sup> 前掲『武道初心集』、30頁

<sup>7</sup> 前掲『武道初心集』、31頁

<sup>8</sup> 前掲『武道初心集』、32頁

<sup>9</sup> 菅野覚明『武士道の逆襲』、講談社現代新書、2004年、202頁

- <sup>10</sup> 田原嗣郎他編『日本思想大系 32 山鹿素行』、岩波書店、1970年、59 - 147 頁
- <sup>11</sup> 前掲『山鹿素行』、59 頁頭注
- <sup>12</sup> 許衡（1209 - 1281）。元の世相に仕えた朱子学者。
- <sup>13</sup> 前掲『山鹿素行』、59 頁
- <sup>14</sup> 前掲『山鹿素行』、60 頁
- <sup>15</sup> 前掲『山鹿素行』、61 頁
- <sup>16</sup> 同上
- <sup>17</sup> 前掲『山鹿素行』、95 頁
- <sup>18</sup> 前掲『山鹿素行』、97 頁
- <sup>19</sup> 同上
- <sup>20</sup> 同上
- <sup>21</sup> 子母沢寛『味覚極楽』「砲煙裡の食事<子爵小笠原長生氏の話>」、中公文庫、1983年、39 - 40 頁
- <sup>22</sup> 相良亨他編『日本思想体系 26 三河物語 葉隠』、岩波書店、1974年、274 - 275 頁
- <sup>23</sup> 熊倉功夫『文化としてのマナー』、岩波書店、1999年、63 頁
- <sup>24</sup> 徳川義親『日常礼法の心得』、実業之日本社、1939年、17 - 18 頁
- <sup>25</sup> 続群書類従完成会編『群書外題 第3巻』、続群書類従完成会、1986年、294 頁
- <sup>26</sup> 横山重・松本隆信編『室町時代物語大成 第7』、角川書店、1979年、243 - 250 頁
- <sup>27</sup> 深沢秋男編『假名草子集成 第42巻』、東京堂出版、2007年、149 - 150 頁
- <sup>28</sup> 江馬務他訳・校訂『大航海時代叢書IX 日本教会史 上』、岩波書店、1967年、506 - 528 頁
- <sup>29</sup> 前掲『三河物語 葉隠』、242 - 243 頁
- <sup>30</sup> 前掲『三河物語 葉隠』、231 - 232 頁
- <sup>31</sup> 同上
- <sup>32</sup> 同上
- <sup>33</sup> 前掲『三河物語 葉隠』、227 頁
- <sup>34</sup> 前掲『三河物語 葉隠』、242 - 243 頁
- <sup>35</sup> 同上
- <sup>36</sup> 同上
- <sup>37</sup> 同上
- <sup>38</sup> 前掲『三河物語 葉隠』、241 - 242 頁